

原 著

天平時代の精神医学
— 藤原宮子の病状とその治療 —

Psychiatry in the Tenpyo period:
Symptoms and treatment of Fujiwara Miyako

鈴木 英 鷹

要約：藤原不比等の娘である藤原宮子は、本来藤原氏出身で初めて天皇の母となったこと一点をとっても、奈良時代史のなかでもっと注目が集まってもよい人物であるが、聖武天皇の母、光明子の姉であり姑であることはあまり省みられていない。宮子は聖武天皇を出産してから「幽憂」の状態にあって調子が悪く、わが子の聖武天皇すら、生んで以来36年も会わなかったという。そこへ吉備真備らと入唐し、天平7年(735)に帰国した玄昉が宮子を看護して、たちまち快癒させ、実に36年ぶりに宮子と聖武天皇の母子対面となったことを、『続日本紀』天平9年(737)12月の記事は伝える。この論文では宮子の病状と治療について当時の医療事情を踏まえ検討した。

Key Words：医学史，藤原宮子，聖武天皇，^{しよくにほんぎ}続日本紀，種々薬帳，天平時代

1. はじめに

『日本書紀』の後をうけ、8世紀末から10世紀には5つの勅撰史書が成立した。すなわち『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』である。『続日本紀』は2番目の勅撰史書で40巻からなる。文武天皇元年(697)から延暦10年(788)まで9代の天皇の治世を収録する。その編纂過程は複雑で、延暦13年(794)にまず後半が、つづいて延暦16年(797)に前半が奏上され、このときはじめて『続日本紀』の書名が与えられた。修

史は延暦以前にさかのぼり、天平宝字期より始まったと推測されている。撰者には石川名足・淡海三船・当麻永嗣・上毛野大川が確認され、最終段階の編纂は藤原継縄・菅野真道・秋篠安人・中科巨都雄が担当した。『続日本紀』は素材史料も律令公文を中心とするため内容の信頼性が高く、『日本書紀』を継ぐ国史として8世紀の根本史料である。豊富な宣命・大仏開眼の盛儀・奈良時代の継起した政変などみるべき内容が多い¹⁾。

『続日本紀』天平9年(737)12月の記事では、「皇太夫人藤原氏、皇后宮に就きて、僧正玄昉法師を見る。天皇も亦、皇后宮に幸したまふ。皇太夫人、幽憂に沈み久しく人事を廢むるが為に、天皇を誕れましてより會て相見えぬ。法師一たび見て慧然として開悟す。是に至りて適天

Hideo Suzuki, M.D., Ph.D.
大阪河崎リハビリテーション大学
リハビリテーション学部
E-mail: suzukih@kawasakigakuen.ac.jp

皇と相見えたり。天下、慶び賀がぬは莫し。即ち、法師に絁一千匹、綿一千屯、糸一千絢納、布一千端を施す。」とある。藤原宮子は聖武天皇を出産してから調子が悪く、ずっと病床にあって、わが子の聖武天皇すら、生んで以来36年も会わなかったという。そこへ玄昉が宮子を看護して、たちまち快癒させ、実に36年ぶりに宮子と聖武天皇の母子対面となった。玄昉がたびたび看ただけで、どうして病状が改善したのか。その治療について『続日本紀』は言及していないため、治療はもとより病状を含め様々な憶測が作家を中心に成されてきた。本論文ではそれらを踏まえ、精神医学の立場から藤原宮子の病状、治療を検討することにした。

2. 藤原宮子の人物像

『続日本紀』については新日本古典文学体系（岩波書店刊）の『続日本紀』全5巻を基本文献として、藤原宮子に関する記事を個抄出し、これをもとに表1を作成した。

この表から伺えるのは藤原宮子に関する記事が非常に少ないことである。藤原宮子は本来藤原氏出身で初めて天皇の母となったこと一点をとっても、奈良時代史のなかでもっと注目が集まってもよい人物である。しかし神亀元年(724)3月におきた尊号の一件で触れられる程度で、聖武天皇の母、藤原光明子の姉であり姑であることはあまり省みられていない。藤原宮子に対する研究関心が低調なのは、宮子自身が積極的な事跡を残さない点に一因がある。

『続日本紀』は、上述のながらく幽憂に沈んで人事を廃した宮子をはじめて聖武天皇と対面した逸話を伝える。しかし玄昉によって「開晤」を得た後でも、宮子の表立った行動はみられない。八幡大神禰宜尼の東大寺参拝・大仏開眼会への行幸・鑑真の授戒と、著石な仏教史の場面においても、天皇(孝謙)・太上天皇(聖武)・

太后(光明子)が一緒に参加しているものの、中宮太皇太后(宮子)はついに姿をみせないものである。

それでも一方では、宮子に対する処遇の厚さを見過ごすわけにはいかない。天平勝宝元年(749)に皇后宮職が紫微中台に改組された同じ日、宮子に対して設けられていた中宮職は中宮省へと昇格した。また天平宝字4年(760)には宮子・光明子の御墓を山陵とし、忌日を国忌の例に加えている。宮子が亡くなった天平勝宝6年(754)から翌年にかけての写経・齋会も同様の性格を帯び、一貫した待遇は国母として遜色のない宮子の地位を示すものであろう²⁾。

『続日本紀』には宮子の生年についての記載はないが、没年については記しており、その御陵についても佐保山西陵といわれているが所在は不明である³⁾。北浦定政の『打墨縄』、津久井清影の『陵墓一隅抄』はともに聖武天皇佐保山南陵の北西に当たる「大黒之芝」と称する地を示している。嘉永元年にかかれた北浦定政の『打墨縄』では、「聖武陵の西北に、字大黒が芝とよぶ所あり、こは式に、文武の皇后の佐保山西陵とあるは、是也。則大黒は大皇后の訛なり。」と記載されている⁴⁾。現在、佐保山西陵と伝承されている所には黒髪山神社が祀られている(図1)。図1と図2は著者が現地を訪れた時に撮影したものである。また神社の隣には「史跡 大黒芝 佐保山西陵 七ツ石 聖武天皇生母藤原宮子后宮墓陵石」の看板があるが、これが図2のどれを指しているか判然としない。

表1 藤原宮子関連年表

西暦	年号	天皇	事項
697	文武天皇元年	文武	8月20日、藤原朝臣宮子娘を夫人とし、紀朝臣竈門娘・石川朝臣刀子娘を妃とす。
701	大宝元年	文武	是の年、夫人藤原氏に、皇子誕生。
713	和銅6年	元明	11月5日、石川・紀の二嬪の号を貶し、嬪と称すること得ざらしむ。
724	神亀元年	聖武	2月4日、天璽国押開豊桜彦天皇は、天之真宗豊祖父天皇の皇子なり。母を藤原夫人と曰す。 2月6日、勅して正一位藤原夫人を尊びて大夫人と称す。
737	天平9年	聖武	12月27日、皇太夫人藤原氏、皇后宮に就きて、僧正玄昉法師を見る。天皇も亦、皇后宮に幸したまふ。皇太夫人、幽憂に沈み久しく人事を廢むるが為に、天皇を誕れましてより會て相見えぬ。法師一たび見て慧然として開晤す。是に至りて適天皇と相見えたり。天下、慶び賀がぬは莫し。即ち、法師に緇一千匹、綿一千屯、糸一千絢納、布一千端を施す。
738	天平10年	聖武	3月28日、山階寺に食封一千戸を施す。鵜寺に食封二百戸。隅院に食封一百戸。
754	天平勝宝6年	孝謙	7月13日、頃者、大皇太后、枕席安からずして、稍く旬月に延く。百方救療すれども、猶平復せず。 7月19日、太皇太后、中宮に崩りましぬ。 8月4日、正四位下安宿王、誅人を率ゐて誅奉る。諡して千尋葛藤高知天宮姫之尊と曰す。是の日、佐保山陵に火葬す。
760	天平宝字4年	淳仁	12月12日、太皇太后・皇太后の御墓は、今より以後並に山陵と称せ。その忌日は亦国忌の例に入れて、設齋すること式の如し。
763	天平宝字7年	淳仁	5月6日、大和上鑿真物化す。……和上諱に誦して多く雌黄を下す。また、諸の薬物を以て真偽を名かしむ。和上一一鼻を以て別つ。一つも錯失ること無し。聖武皇帝、これを師として戒を受けたまふ。皇太后の不念に及びて、進れる医薬、驗有り。

3. 宮子の病状

『続日本紀』天平9年12月の記事に「幽憂」を従来から『続日本紀』の解説本では、うつ病としている。陰陽五行説(表2)から検討すれば、五臓の生み出す感情である五志において、憂は金性(即ち肺臓)に属し、憂は悲とほぼ同義と考えられるので、「幽憂」をうつ状態と考えるのは無理はない。しかし「幽憂」を単純にうつ病と解釈しても良いのかという

事には疑問が残る。岡田は「36年間にわたって憂鬱にせずんでいた後に、しゃんとしたという記述をうつ病と見ることも可能であるが、うつ病ならば病期が長すぎるので、統合失調症性の亜昏迷状態にあったものが晩年寛解したもの」とみている⁵⁾。

病状のごとく、宮子は聖武天皇を出産してから調子が悪く、ずっと病床にあって、わが子の聖武天皇すら、生んで以来36年も会わなかったという。そこへ吉備真備らと入唐し、

天平7年(735)に帰国した玄昉が宮子を看護して、たちまち快癒させ、実に36年ぶりに宮子と聖武天皇の母子対面となった。「一たび看て(原文は漢文で一看)」の看は看護の看で、僧侶が病をみることは僧尼令の中にも規定がある。天皇の生母の病気であるので、当時の名医が治療を試みたことであろうが、効果がなかったのが結果的に36年間も「幽憂」に沈んでいた。それを玄昉が一たび看ただけで、どうして病状が改善したのか。玄昉の治療について『続日本紀』は直接言及していないが、これについてヒントとなる記事が『続日本紀』にある。天平8年(736)8月の記事「入唐副使従五位上中臣三人、唐の人三人、波斯一人を率ゐて拝朝す」、同年11月の記事「波斯人李密翳らに位を授くること差有り」である。これらの記述から、玄昉が波斯人(ペルシア人)李密翳を宮子の治療に関与させたことが推察されるが⁶⁾、一方、これ

を否定する説⁷⁾もある。

いずれにせよ玄昉の治療が有効であったことは、「法師に緇一千匹、綿一千屯、糸一千絢納、布一千端を施す。」とある様に褒賞品が当時としては膨大であることから伺え、その手段として何らかの興奮作用のある薬物⁸⁾⁹⁾を使用したと考えるのが自然であろう。

天平9年(737)12月の記事の後も、宮子の表立った行動はみられない。すなわち大仏開眼会への行幸・鑑真の授戒と、著明な仏教史の場面においても宮子はずいぶん姿をみせない。このことは「幽憂」再燃の可能性があり、実際、『続日本紀』天平宝字7年(763)5月の鑑真物化(死亡)の記事に、「和上諳に誦して多く雌黄を下す。また、諸の薬物を以て真偽を名かしむ。和上一一鼻を以て別つ。一つも錯失ること無し。皇太后(宮子)の不念に及びて、進れる医薬、驗有り」と記載されている。

表2 五行の配当表

五果	五菜	五畜	五穀	五声	五変	五液	五志	五惡	五味	五香	五色	五季	五支	五主	五竅	五腑	五臟	五行
李 <small>すもも</small>	韭 <small>にら</small>	鶏 <small>にわとり</small>	麦 <small>おむぎ</small>	呼 <small>よびさけぶ</small>	握	涙 <small>なみだ</small>	怒	風	酸	臊 <small>あぶつくさい</small>	青	春	爪	筋	目	胆	肝	木
杏 <small>あんず</small>	薤 <small>らっきょう</small>	羊 <small>ひつじ</small>	黍 <small>きび</small>	言 <small>いう</small>	憂	汗	(笑喜)	熱	苦	焦	赤	夏	(面毛色)	血脈	舌	小腸	心	火
棗 <small>なつめ</small>	葵 <small>あおい</small>	牛	粟 <small>あわ</small>	歌 <small>うたう</small>	噦 <small>しゃつくり</small>	涎 <small>よだれ</small>	(慮思)	湿	甘	香	黄	土用	(唇乳)	肌肉	口	胃	脾	土
桃	葱 <small>ねぎ</small>	馬	稻	哭 <small>かなしみなく</small>	效 <small>せき</small>	涕 <small>はなじる</small>	(憂悲)	燥 <small>かわく</small>	辛	腥 <small>なまごさい</small>	白	秋	息	皮	鼻	大腸	肺	金
栗	藿 <small>まめのは</small>	豕 <small>ぶた</small>	豆 <small>だいず</small>	呻 <small>うなる</small>	慄 <small>ふるえる</small>	唾 <small>つば</small>	(驚恐)	寒	鹹 <small>しおからい</small>	腐	黒	冬	髮	骨	耳	膀胱	腎	水

4. 玄昉の治療

玄昉の行った宮子に対する治療が有効であったことは、「法師に緇一千匹、綿一千屯、糸一千絢納、布一千端を施す。」とある様に褒賞品が当時としては膨大であることから伺える。また「幽憂」の状態にあるので、その改善に何らかの興奮作用のある薬物⁸⁾⁹⁾を使用したと考えるのが自然であるが、薬物療法に加えて精神療法の効果も看過できない。玄昉はその巧みな術を駆使してか、宮子の圧倒的な信頼を得ていた可能性がある。その一つの証拠として『続日本紀』の後をうけ成立した『日本後紀』の延暦16年(794)4月の記事には、「僧正善珠卒す。年七十五なり。皇太子、其の形像を図きて秋篠寺に安置す。皇太子、病悩の間、般若の験を施し、仍りて抽賞せらる。法師は、俗姓安都宿禰。京兆の人なり。流俗言えること有り、「僧正玄昉、太皇后藤原宮子に蜜に通す。善珠法師、実は是れ其の息なり。云々」と。」とあり、その不敬とも思われる記述に驚かされる。

玄昉の行った治療内容については当時の様々な状況、事象をつなぎ合わせて推測する以外に術はない。天平8年(736)8月の記事「入唐副使従五位上中臣三人、唐の人三人、波斯一人を率ゐて拜朝す」、同年11月の記事「波斯人李密翳らに位を授くること差有り」から、玄昉が李密翳に限らず波斯人(ペルシア人)を宮子の治療に関与させたことが推察される。

ここで李密翳について伊藤の解説を紹介すると、李というのは胡人によくつける名前であり、李密翳はイラン語形に戻すとRam(a)yar(ラムヤール<ラムアヤール>)となり、完全にイラン人であるという⁶⁾。また「翳」という字は醫の誤記ということで、李密翳は医者であったという説があるが、これも医者ならば醫という字が上につき醫李密ということになるので、この説は誤りであるという¹⁰⁾。

5. 玄昉の行った治療を推測する (その1:インド大麻と麻黄)

世界で最も早く麻の麻酔作用を知り、それを快楽に用いた徴証があるのは、古代イラン人の一派たるスキタイであり、ヘロドトスは『歴史』の中で、南ロシアのスキタイ人が赤熱した石の上で大麻の葉を焙り、その蒸気を吸って歓喜に酔いしれていたと述べている。

またイラン人の間では非常に古くから麻による麻酔が知られており、一方彼らのマジによって切開手術的な幻術が行われていたという。長安などに西域から移り住んでいたイラン人は、大麻を喫い、幻覚症状を愉しんでいた。漢人は彼らを「眩人」または「幻人」と呼んでいた⁸⁾。図3は正倉院中倉に所蔵されている「墨絵弾弓」に描かれているものであるが、図に登場する人物像は「眩人」または「幻人」と呼ばれていた人々である。かれらは殆どが祇教(ゾロアスター教)であった。

ゾロアスター教のイラン人が宮子の治療に関与していたならば、当然、大麻の薬理作用を理解していたであろう。インド大麻には疲労回復、精力増強、中枢神経興奮作用があるとされているが、日本でとれる麻であるCBDA(Cannabidiolic Acid)種にはインド大麻のような薬理作用がないという報告がある⁹⁾。その要点を列挙すると、

- ① CBDA種が日本古来の麻である。
- ② 中国においても麻が大麻として医薬に用いられなかったことから中国の麻も恐らくCBDA種であろう。
- ③ CBDA種がTHCA(Tetrahydrocannabinolic Acid)を含まず大麻として利用し得ない。
- ④ 有効成分であるTHC(Tetrahydrocannabinol)は、熱にあうと元々植物に含まれていた成分であるTHCAが分解して二酸化炭素を放ち、生成する。
- ⑤ THCAを多く含んでいて麻酔作用を持つ麻

はカスピ海沿岸を中心に、一つはアラビア半島を横断してインドの方に、一つは北上してトルコに、もう一つは北アフリカの方角にと、だいたい3つの方向に移動している。CBDA種はシベリア中部を原産地として、ヨーロッパ北部、中国・日本、アラスカへと移っている。

有効成分であるTHCの精神作用としては夢幻的陶酔状態を引き起こす。精神的緊張を解き気分が陽気になる。視覚、聴覚の変化によって一種の非現実感にひたり、時間や空間の感覚にゆがみを生じ、時には身体が浮いたような感じを起させる。身体が宙に浮くだけでなく、手足がバラバラになる感じを受けることもある。

一方で、THCAを多く含んでいて麻酔作用を持つ麻が日本にも存在していた可能性があり、それについて触れた文献を紹介する。『播磨国風土記』の「麻打山」の記述には、「麻打山。昔、伊頭志(出石)の君麻良比というのがこの山の家にいるとき、二人の女が、夜、麻を打っていたが、まもなく麻を自分の胸において死んでしまった。今にこのあたりにいる者は、夜になると麻を打たない。」という記事がある。麻はその繊維を取って糸にするが、その花と葉の流汁には麻薬性があり、「女が夜間にこっそり麻の麻薬を常習的に吸っていたのが死んだということかもしれない。とすると麻を「胸に置いて」は「胸に抱きて」の意になる。夜間に麻を打つのが禁忌になったのは、夜になって麻の花や葉を吸引するからであろう。」と松本清張は推測している¹¹⁾。また『古今要覧稿』は江戸幕府の命により当時の百科全書派的碩学、屋代弘賢が主任となって完成した江戸期最大の百科事典であるが、この中に「この生薬には毒ある物なり用薬須知に令人狂笑不止といへりある人の園中に繁茂したる葉を其僕採てゆびき味噌にあへて食せしに間もなく人事をしらずなりたりときけりしびれの病を麻木といふも是等の事より

いひしなるべし佐藤成祐は花にも殊の外毒あり実も皮を去り仁ばかりを食すれば上気する物なり皮と共に食すれば害なしといへり」という記述があり¹²⁾、松浦静山の『甲子夜話』の中にも「麻の初生の芽を食すれば発狂す」という記述がある¹³⁾。

また、ゾロアスター教の盛んであったカスピ海沿岸には麻黄がとれ、麻黄にはエフェドリンが豊富に含まれている。エフェドリンは覚醒作用が強いので、宮子の治療に使える可能性はある。日本では麻黄は採取されないが、奈良時代には中国から結構輸入されていたようである。その根拠として1988年の奈良国立文化財研究所の調査で、藤原京出土の木簡は、①荷札・付札、②処方書、③薬物請求・受領書の三種類に分類できるとされている。このうち荷札・付札、処方書の中に麻黄と書かれている木簡があることを挙げておく¹⁴⁾¹⁵⁾。

6. 玄昉の行った治療を推測する (その2：寒食散)

はじめに寒食散とはどのような薬物かを述べる。寒食散は魏晉に始まり唐末宋初に至る数百年間に亘り中国社会を風靡した5種の石薬を主剤とする薬で、その効用は一種の覚醒剂的なものである。然しその用法用量に厳重な“節度”があり、若し之を破るならば恐るべき中毒症状をひきおこして死に至るものである。その害毒は清末の阿片のそれにも比すべきもので中古中国史上没すべからざる奇怪な薬であった。寒食散は魏晉の名士何晏が強精強壯をはかろうとして服用したのが始まりである。『千金翼方』の五石更正散が相当するものとおもわれる。五石散とは石薬、すなわち、紫石英、白石英、赤石脂、鐘乳、石硫黄からなり、この組成はいわゆる体を熱する熱薬である。何晏に先立つこと約100年前の著、張仲景の『金匱要略』に紫石寒

石散の名がみられることから、これにヒントを得たものであるといわれている。またこの中毒を解消する目的で、『千金要方』などには、解寒食散剤の名もみられ、それらの多くは当然、寒薬（朴硝、芒硝、石膏、凝水石、硝石、齒臙等）からなる。寒食散服用者が嚴重に守らなければならないとされてきた“節度”とはこの薬の用法を誤らないのみならず、薄着をし、どんどん歩きまわらねばならぬ。歩くことによって薬の効き目があらわれるので、これを「散發」という。散發しなかった寒食散の恐ろしい毒にやられる。だから路を歩いて散發することを「行散」という。またこの薬を飲んだあとは、冷水を身体にかけて冷たいものを食べなければならぬ。それで寒食散というのだが、ただ一つ例外は熱い酒を飲むことである。この方法を間違えると死ななければならぬ。これで見ると「散歩」という語は寒食散から来ている¹⁶⁾。

魏晉に始まり唐末宋初に至る数百年間に亘る中国における服石の風習は、隋唐との交易の盛んであった奈良時代に我国に波及しない筈はなかった。奈良時代の医学に影響を与えた中国系医学とは、道教の医学的部門である。道教の根本は不老長寿にあり、当然のことながら仙薬の作り方とその服用法である服餌^{ふくじ}が最も重要である¹⁷⁾。不老不死を得るための仙薬として第一に挙げられるのが丹と金液である。丹は主成分が硫化水銀であり、水銀には不死の効能があると考えられた。また水銀や金以外で仙薬をつくる材料として、玉石が草木よりも重要視された。

『続日本紀』で玉石関係の記事を抄出してみると、文武天皇2年6月「近江国、白礬石を献る」、同年9月「近江国をして金青を献らしむ。伊勢国は朱沙・雄黄、常陸国・備前・伊豫・日向の四国は朱沙、安藝・長門の二国は金青・緑青、豊後国は真朱」、文武天皇3年3月「下野国、雌黄を献る」、和銅6年5月「大倭・参河をして並に雲母を献らしむ。伊勢は水銀。相模

は石流黄・白礬石・黄礬石。近江は慈石。美濃は青礬石。飛騨・若狭は並に礬石。信濃は石流黄。上野は金青。陸奥は白石英・雲母・石流黄。出雲は黄礬石。讃岐は白礬石」とある。これらの鉱物が石薬か否かは疑問の存するところであるが、石薬に使用可能な鉱物が奉獻されていることには注目せざるを得ない。

天平勝宝8歳(756)6月21日の聖武天皇の七七忌に際して光明皇太后によって東大寺(正倉院)に献納された薬物の一覧である『種々薬帳』には、寒食散の原料である、鐘乳床、赤石脂、白石英が記載されており、また同時に、また寒食散中毒を治すのに用いられた解散薬であるところの金石陵、石水氷、紫雪が見受けられる¹⁸⁾。このように金石陵以下の解散薬が『種々薬帳』にみえることは(図4・図5・図6)、逆に寒食散の服用が行われていたことの何よりの証拠であろう。また寒食散には強精強壯、神経刺激作用があることは、奈良時代の医学に於いて、精神に働きかける薬物の存在を示唆するもので興味深い。

玄昉が「幽憂」の状態にあった宮子の治療に、神経刺激作用のある寒食散を用いた記事や資料はない。しかし当時の知識人であった玄昉が寒食散の存在を知らない訳はないであろう。

7. おわりに

終わりにかえて宮子の治療に寒食散を使用した可能性を検討する。表1に天平10年(738)3月28日の記事、「山階寺に食封一千戸を施す。鶺鴒寺に食封二百戸。隅院に食封一百戸。」とある。『続日本紀』や正倉院文書では「隅院」「隅寺」と呼ばれているのは海龍王寺のことである(図7)。「隅寺」とは藤原不比等邸の東北の隅にあったことから付けられたという。「隅寺」の創建について伝承では、天平7年(735)に光明皇后の発願で玄昉が建立したといわれている

が正史には記載がない。また「隅寺」は藤原宮子が養生のため暮らしていたという伝承があるがこれも正史には記載がない。著者が海龍王寺を訪ね住職に伺ったところでも、寺の記録にはそのような記載がなく、天皇の生母といえども、女性が寺に暮らすなど当時の常識では考えられないとのことであった。しかし病人となると話は変わる可能性があり、実際宮子は「幽憂」の状態であったので寺で特別に養生していた可能性は残る。また海龍王寺の隣には法華寺がある。もともと法華寺の地には宮子と光明皇后の父である藤原不比等の邸宅があり、不比等の没後に光明皇后が皇后宮を置き、天平17年(745)に皇后宮を宮寺としたのが法華寺であり、天平19年(747)頃に総国分尼寺と位置付けられた。聖武天皇の生母で、光明皇后の姑であり、姉である宮子が、なぜ不比等邸ないし法華寺ではなく、海龍王寺で暮らしたと伝承されるのか。ここに著者は宮子の治療に寒食散を使用していた匂いを感じるのである。前述の如く寒食散服用者が厳重に守らなければならないとされてきたことは、寒い所に暮らし、薄着をし、どんどん歩きまわらねばならぬことであり、この薬を飲んだあとは、冷水を身体にかけて冷たいものを食べなければならないことであった。このようなことから、宮子の生活の舞台は、法華寺に比べ簡素な海龍王寺が適していたのではないかと推測するのである。

奈良時代の医学に関しては、富士川游博士の名著『日本醫學史』をはじめ、諸家の論攷また少なしとしないが、しかしながら、その多くは全医学史の一部としてこれに触れられたのに過ぎず、奈良時代の医学を主題とした述作は僅少である。その理由として文献の少なさと記述の不十分さが挙げられる。確かに奈良時代には『万葉集』『風土記』などの文献があるが、医事に関する記述は少ないか、言及されていても不十分である。また奈良時代には個人が残した日記

や記録がないことである。このように悪条件の中、『続日本紀』など少ない資料をもとに、天平時代の医療について推理を働かすことに医学史研究の醍醐味がある。

8. 文献

- 1) 遠藤慶太“平安勅撰史書研究”皇學館大学出版部, 伊勢, 2006, p.1-3.
- 2) 正倉院文書研究会編“正倉院文書研究7”吉川弘文館, 東京, 2001, p.22-38.
- 3) 国史大辞典編集委員会編“国史大辞典第12巻”吉川弘文館, 東京, 1991, p.187.
- 4) 有馬祐政編“勤王文庫第3編”大日本明道会, 東京, 1921, p.235-24.
- 5) 岡田靖雄 日本精神科医療史ノート. 最新精神医学 1999, 4:91-96.
- 6) 松本清張“謎の源流”角川書店, 東京, 1981, p.49.
- 7) 鈴木靖民“古代対外関係史の研究”吉川弘文館, 東京, 1985, p.520-551.
- 8) 江上波夫“江上波夫文化史論集5(遊牧文化と東西交渉史)”山川出版社, 東京, 2000, p.333-351
- 9) 西岡五夫 大麻の研究. ファルマシア 1975, 11: 327-330.
- 10) 松本清張“謎の源流”角川書店, 東京, 1981, p.63.
- 11) 松本清張“私説古風土記(松本清張全集55)”文芸春秋, 東京, 1984, p.237-238.
- 12) 屋代弘賢“古今要覧稿第5巻(国書刊行会編)”国書刊行会, 東京, 1906, p.687-693.
- 13) 松浦静山“甲子夜話2”平凡社, 東京, 1977, p.103.
- 14) 立木 修 藤原宮出土の薬物木簡と古代医療の一側面(7, 8世紀における石薬使用の可能性をめぐって). 古代文化 1989, 41: 728-738.
- 15) 丸山裕美子“日本古代の医療制度”名著刊行会, 東京, 1998, p.84-102.
- 16) 益富壽之助“正倉院薬物を中心とする古代石薬の研究(正倉院の鉱物I)”日本礦物趣味の会,

京都, 1958, p.21-22.

17) 和田 萃 “日本古代の儀礼と祭祀と信仰 中”
塙書房, 東京, 1995, p.98.

18) 益富壽之助 “正倉院薬物を中心とする古代石薬
の研究 (正倉院の鉱物 I)” 日本礦物趣味の会,
京都, 1958, p.74-81.



図1 黒髪山神社 (奈良市佐保山)



図2 佐保山西陵七ツ石
(伝聖武天皇生母藤原宮子后宮墓陵石)

図3 墨絵弾弓 (正倉院中倉所蔵)





図4 種々薬帳 (部分)
(鐘乳床, 赤石脂の記載がみられる)



図5 種々薬帳 (部分)
(紫雪の記載がみられる)



図6 種々薬帳 (部分)
(石水氷, 金石陵の記載がみられる)

図4, 5, 6の出典
(朝比奈康彦：正倉院薬物。植物文献刊行会)



図7 海龍王寺
(『続日本紀』では隅寺と記載されている)